千蔭と梅花

——春曙文庫蔵『梅花辞』翻印——

Chikage and the Flower of a Plum

——A Reprint of "*Umehana-no-ji*" of the Soai University Library——

山本和明

はじめに

本学図書館貴重資料室に、江戸後期の和学者、橘千蔭・村田春海・安田躬弦による『梅花辞』一軸が収蔵されている。この梅花をめぐっての和文は、近年の研究により「和文の会」と称する和学者の集いの中から創作されたものとされるが、『梅花辞』は、そうした自筆資料の中の一つと目される。本稿では、資料紹介を兼ねて『梅花辞』を翻印し、基礎的なデータをひとまず呈示したいと思う。考察は稿を改めることとする。

『梅花辞』に関する書誌その他

本学所蔵本の概要を摘記しておく。

相愛大学図書館貴重資料室収蔵『梅花辞』は、覗色雲鳥紋表紙に書き題簽で「梅花辞」とある。紙幅一七・一糎、一紙四九・二糎、全長四五三糎からなる巻子本一軸（請求番号　春一〇五三）。本文は、料紙鳥の子紙に、梅幸茶色地の木版刷にて梅花模様があしらわれている。平成八年一月『思文閣古筆資料目録』所載。当時、本学「春曙文庫」に収蔵された。

その内容であるが、①「二月斗あがたの梅を見る辞」②「長月斗松岸といへる所にすめる桃樹がり行て黄葉をめづる辞」橘千蔭　③「二月ばかりあがたの梅をめづる辞」平春海　④〔無題〕（安田）躬弦、という構成となっている。②を除く全てが、梅花にかかわる和文によって構成されている事になる。加えて、短冊等の資料からみるに、各々自筆の文章と目される。また、継紙の状況から考えるに、少なくとも①②は同じ時期に記されたものである。

①から④の和文の中で、②は享和二年（一八〇二）十二月に刊行された橘千蔭の私撰集『うけらが花』巻七に「雨岡がり行きて黄葉をめづる辞」と題して収録されている。雨岡は吉田桃樹のこと。字甲夫、通称忠蔵。幕府与力にて千蔭や春海とも親しかった。著書に『槃遊余録』あり。享和二年に没し、享年六六。②末尾に「こは寛政四の年の事なりけり」とあるため、「雨岡がり行きて黄葉をめづる辞」の成立時期が、これにて寛政四年（一七九二）秋のことと知れる。

また、③「二月ばかりあがたの梅をめづる辞」は、文化十年に刊行された『琴後集』巻十に「二月ばかり山里の梅をめづる記」と改題し掲載されているものに同じ。

諸本概略

この『梅花辞』の内容と同じものを記した諸本については、田中康二『村田春海の研究』（汲古書院・二〇〇〇年

十二月）が参考となる。同書には、江戸派「和文の会」資料が、第一部第一章第三節（三六頁）に一覧となって掲載されている。その〈①〉に「うめを見る詞」として掲げるものが、本学『梅花辞』とかかわり深いものである。田中氏はその参加者として「妙性尼・あき子・ませ子・平春海・ももき・躬弦・縫子・橘千蔭」とされた。以下、田中氏の調査を踏まえ、諸本の概要を確認しておきたい。ちなみに『梅花辞』は、それに新たに加わる自筆資料ということになる。

（A）　大阪市立大学学術情報総合センター森文庫に『桜を見る日』写本一冊がある（請求番号**914.5-KAT**）。縦一五・五糎×横二二・六糎。墨付一八・五丁。所蔵先登録書名には「桜を見る日」とあるが、共紙表紙を確認するに直書された表題「梅乎見（梅を見）」がかすかに読める。その構成だが、③「二月斗あかたの梅をめつることは」平春海→④〔無題〕躬弦→〔無題〕もゝき→〔無題〕縫子→①〔無題〕たちはなの千蔭、の順となっている。すなわち「二月斗あかたの梅をめつることは」を内題として、春海・もゝき・縫子・千蔭の和文を収めているのである。全て同筆で千蔭流の筆跡である。

（B）　大阪府立中之島図書館蔵『宇女を見る詞』写本一冊（請求番号**224-122**）。縦二六・八糎×横十九・六糎。墨付二七丁。構成内容だが、〔無題〕常性尼（ママ）→〔無題〕あき子→〔無題〕ませ子→③「二月はかりあかたの梅をめつることは」平春海→〔無題〕もゝき→④〔無題〕躬弦→「あかたの梅をみることは」縫子→①「二月斗あかたの梅を見る辞」橘千蔭となっている。筆跡からみて後年の書写によるものと思われる。

他にも、田中氏の云う「千蔭の草稿とおぼしきもの」が、国立国会図書館蔵『枝直千蔭詠草』（マイクロフィルム請求番号**YDA 1304**）に収録されている。

資料の背景

A・Bならびに『梅花辞』を披見するに、A・Bはその分量に相違があるものの、その配列においてもほぼ同じであり、「和文の会」なるものが開催されたならば、恐らくその雅会の書留か、その写しと考えて良いだろう。それに対し、『梅花辞』は自筆資料であり、三人の和文のみが収録されている。特に「梅花」だけでなく②のような別の資料も混入しているため、その位置づけは難しいが、ここに一つ参考となる例がある。明和二年（一七六五）に男方・女方と分かれ行われた歌合の書留を記した、文政八年（一八二五）刊行の『賀茂下流梅合』なる版本が存在する。その序によれば、田安家にて開催された会の書留であったが、「真淵主集玉ふ男かたの文并長歌短歌」と文中にあるように、男方の和文は賀茂真淵によって集められており、その「場」に在り合わせての文詞ではなかった。この一例を考えるとき、『梅花辞』は、後になって改めて書き記したものとも、会に参加した際の書留とも、会のために千蔭によって集められた和文であるとも、様々な可能性も強ちないわけではあるまい。全て参集してのものとは断言できない限り、今しばらく周辺資料の検討を進める必要があろう。

とまれ、『梅花辞』という、現段階で寛政四年以降享和二年までの成立と目される自筆資料の存在は貴重なものと言える。今後の研究の進展を考え、以下、『梅花辞』の翻刻、ならびにその節の和文と目される資料をも含め翻印しておきたい。

『梅花辞』翻印

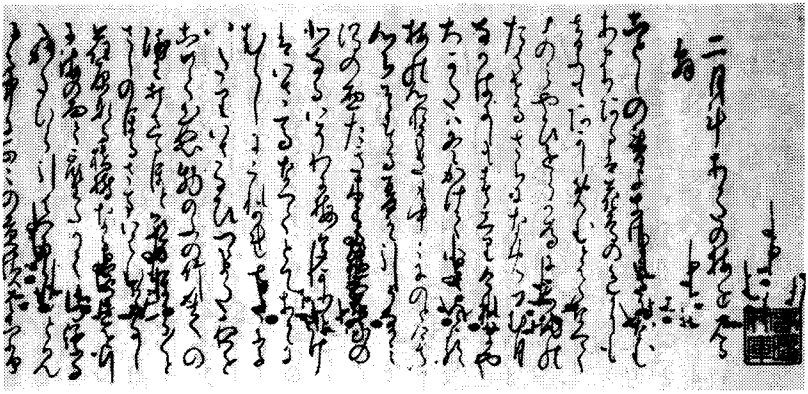
〈凡例〉

○翻刻に際し、任意に漢字を宛てることはしなかった。
○濁点・句読点は、原文には附されていない。しかし、判読の便宜をはかるため、大阪府立中之島図書館所蔵本を参考にして任意に施した。
○本文の改行箇所については「／」によって明らかにした。
○本文中、示された和歌については、改行し一行をとって二字下げとした。
○著者名が示されている場合、改行し下部に示した。
○〔　〕内は本文にないもので、補足説明のために記した。

「梅花辞」

二月斗あがたの梅を見る辞

ことしの春よ、きさらぎになむ、／あまりあるは花鳥の色にも／音にもあかしめむとて、なべて／よのみやびをらが為に、天地の／たはせるさちになめり。む月／なかばにしも春立りければにや、／大かたは冬かけていそげる／梅の、心おそきも中々にのどけき／心ちぞする。夏そ引うなかみ／潟の西、たき木こる鎌倉山の／北なるいそわに、梅多かりときけ／ば、いさ馬なべてとて、あそに／むらじにこれかれ七たり／八たりいざなひつゝ、また夜を／こめて出ぬ。物のふの竹芝の／浦わ打過るほど、朝日ほがら〳〵と／さしのぼるさま、いはむかたなし。／荏原なる橋桁なる濱辺を行／に、海の面て霞わたりて、浅縹な／るかたびら引はへたらむと見／ゆる中に、千々の貢積はこぶ／なる



百の国べの大舩どもの湊近く／来よれるは、いくそひろかもあら／むとみゆるが、澳放てかゝれるは、／あち村の浮べる如く見えわたる／にも、まことに大江門と名におへる／さへしるくなむ有ける。けふしも／にはよくしほもかなひぬと／いへば、乗つる駒は海辺だに／とゞめて、海士の釣するをぶね／にのりて漕出せり。そこは弓を／張たらむさまにたわめるいそに／して、浪たゝぬほどの朝ごちに、／えならず薫来るをしるべにて／こぎ行ぬ。いそのさまは、もしほ／たれつゝわぶらむとおぼしき／家ゐども、こゝかしこにありて、／其家ゐのめぐりよりうしろの／いそ山かけて、幾千もとゝもなく／うゑわたしたり。いそ際に／舟よせてかちよりぞ行たもとほる。／さてかの磯山のなから斗に／かも敷て見放れば、花かたし栲／の穂に咲ひろごり、青浪の／朝羽振如く、白雲の夕居る／なして、めもあや也。人々哥／しのびし、辞しのびして、盃／あまたゝび廻れるに、日もやゝ西／にかたむきなむとすれど、立かへ／らふ事もわすれて、あるは／けふの遊びに逢みつるかもと、によひ／出、あるは飲ての後はとうたへる／は、不知火筑紫の大みこと／もちのつかさ人らが、うたげせし／もかくこそ有けめとおぼゆ。／かしこは大木の山の麓、こゝは大／城の南いくばくもさらぬ／あがたなれば、よしなきにしも／あらずなむ。其あそが城なき／に

しら玉を／よそひなしたるもろこしの梅／さく嶺に我や来にけむ

長月斗松岸といへる所にすめる／桃樹がり行て黄葉をめづる／辞

いにしへより人のわきかねたる／春と秋とのけぢめは、末の／世にあきらめはつまじければ、／たゞ春は春をめで、秋は秋を／こそあはれむべけれ。久方の／星の逢てふころ、荻の上風身／にしみそめてより、さを鹿／の妻とすなるさいはりに／真袖をにほはし、遠つ人、／初かりがねに玉札の便を／かこち、中ばの秋の月の光には、／千里の外をおもひしに、はや／峯のはゝそ野べの浅茅の／うつろひ行より、草木こと〴〵／たゞならぬぞ秋の哀のとぢめ／なりける。こゝに大城の外の重／の北に、近つ淡海の日枝をうつ／されたるみ山有。其麓は／かしこになぞらへて坂本と／なむいひける。そこよりもおく／まりたるあたりは、ことにいと清ら／に静けさいはむ方なし。いざ／こゝに吾よは経なむとて、はやく／住か求つる人有けり。此ころの／しぐれたつ雲のけはひに、／ふるの山里いかならむと、心／しれる人々かきつらねつゝ訪に、／木高き松に枝かはせるかへでの、／色こがる斗に染なせるは、まことに／もろこしの清き入江にさらせる／錦も及ぶまじくて、さらでだに／うしてふ事は聞も見もせぬ／わたりには、斧の柄もくたしつ／べくおぼゆるを、ましてかく／染尽せる木のもとをば、いかゞは／立うからざらむ。臥待の月／梢を登り、浅ぢの露玉を敷／たらむ如く見えわたるに、名に／負る長月の夜を長しとも／おぼえずかたらひあかしつ。／色々の黄葉の中により／青海の浪をてふ舞をかゞ／やかし、あるは秋の川瀬に／もみぢふける舟を浮べては、／わたつみの御神のしらべを／とゝのへしよや心行わざなり／つらめと、うま人はうま人／どち、やいつこはやいつこどち／てふ古言の如く、これの／あがたのけふの遊びぞ、吾／友がらの楽みのきはみ／なりけるはや

うき秋といひつる／ひとは山里の黄葉の／色を見ずや有／けむ

こは寛政四の年の事／なりけり。

橘千蔭

一一九

二月ばかりあがたの梅を／めづる詞

大伴の宿祢のぬし、今は塵の／世のけがしきをのがれ、そのとほ／つおやなる、つくしのみこともちの／いにしへをしのびいで、、百ちゞの／うめをみきりにねこじうつし、／そをもて、清きこゝろの友となん／なしける。こゝにわがおもふとも／がき相ともなひつゝ、その花のさ／かりをもすぐさじ、世の外の春／をも見むとて、ふりはへてとふ／ことあり。ころはきさらの十日／あまりなるに、かの見ゆるをかべ／の雪は、猶消のこりながら、うち／霞むもりの梢どもは、春の光み／ちわたりて、そこはかとなく聞／ゆるうぐひすのこゑも、人来と／いとふにしもあらで、我をよぶなる／こゝちのすめるは、こゝろゆく夕なり。／そは東の比えのふもとなれば、世／ばなれてかこかにすまひなし／たり。松のとぼそ萱が軒ら、い／とことそぎたるに、おのづからな／る竹むらをまがきにゆひわた／して、せきいるゝ水のながれいさ／ぎよく、石のたゝずまひことさら／ならずしなして、庭のつらいと／広らなるに、うゑそへたる千本の／陰はしも、色に香にとりならべて／露をねたみ、霞ににほへるけは／ひ、この世のものとしもおぼえず／なむある。かくてこそうき世を／そむきはてぬるかひありけれと／て、人〳〵めでくつがへりつゝ、花の／本にまとゐすれば、あるじはさけ／さかなとりまかなひ、かはらけとり／あげて

梅見にと問れもする／か大伴のむかしおぼゆる宿なら／なくに

とによひいでたるを、とり／あへずひとりが

大伴の名／におふやどの梅の花むかしの／はるをわすれやはする

かはらけ／たび〳〵めぐるほどに、月はなや／かにさしのぼりて、木陰もく／まなく見ゆるに、ふくとしもあらぬ／下風に、にほひみちたるは、ゑひ／をすゝむるばかりなるが、いはむか／たなし。人〳〵みなあざれあひて、／あるはやり水に口うちそゝぎて、／のみての後はとうたひ、あるは／苔のむしろにおりゐて、雪を／あざむくとしもくちずさみ／いづるも有。またものゝ音吹ならし／たるは、花にうしろめたきしらべ／の名なるも、をりにあひたるこゝ

ろ／ごゝろ、いづれをかしからぬはあら／ざりけり。いでや、かくあそびの道の／楽しかるも、世のほだしなき人／こそはとて、あるじのほこりがほ／なるを、花のこゝろもしかおもふらん／とぞおぼゆる。さればこよひのあ／りさまをしも、けふ来ぬ友にも／かたらまし。はたのちのおもひ／でぐさにもとて、月の光をともし火／にて、かつ〴〵／ものにかいつくるのみ。

平春海

〔無題〕

躬弦

何がしのあそのなり所は、大城／よりは東北、隅田川の堤を過／て、かつしかのこほり也けり。／小田の細道くろづたひゆけば／賤がふせ庵ところ〴〵／に見え／て、世ばなれにたる野寺のかね／も心すみ、神さびぬる杜の木／立もいとかう〴〵／しう覚ゆ。／こゝに松垣ゆほひかにしわた／して、家居の作ざまつき〴〵／しうこがねしら玉をかざれる／とにはあらで、池の心ひろらか／に、石のたゝずまひたゞならず、／春秋のをりにあひつゝ、見所あ／べき木草の花をなんうゑた／りける。そが中にも東おもてに／廊めきたる屋作り出して、所／につけたるぬのさうし、あじろ／屏風などいとおかしう、遣水の／このもかのもに、梅の木いとおほく／植わたしたるは、春によれる／心しらひなめり。けふしも二月／の十日あまり、咲のさかりなれ／ばとて、おもふどちつどへて、花／の宴をなんしける。先すの子に／よりてのぞむに、うら〴〵とてれ／る日のやゝ山のはちかくなりぬ／る程、花の光いとはえて、たゞ天／津星の影かとおぼえ、のこれる／雪の袖さむからぬこゝちぞす／る。としふりたる木の枝たれ／たるは、天かける龍のむかひふ／せるが如く、高く聳たるほづ／えは、さほ姫の霞のひまより／ふるひれにやと見ゆるに、いでや／とて木の本にわらふだしき／わたし、盃とりつゝおもふに、／大よそよつの時咲出る花の／くさ〴〵おほかる中に、此花はし

も／ふるとしの雪の中よりふくみ／て、霞たつはるさり来れば、い／ちはやくにほひそめぬるを、／ますらをのうへになずらへば、人／しらぬ谷の戸、むぐらとぢたる／窓の中に、つゞりの袂とし月／をかさねて、唐のやまとの書／の道くらからぬ人の、ゆくりなく／ひじりの君にあひまつりて、世／に時めきもちひられたるにぞ／似ためる。はたたをやめにたとへ／ば、親などいみじうかしづきて、深／き閨におひたちぬる人の、みづ／からもうとき人にはみえじなど／おもひあがれるが、ねびと、のほ／りたるころほひまで、さるべき／よすがもなくてなん。あからさま／に打見ては、えんに、ほひやかな／るかたは立おくれて覚る物から、け／ぢかくいひよりては、何事もつきな／からず。うちよみはしりがき、かいひ／く爪音も、いみじう近まさりし／たるにこそ覚ゆれとゑひご、ち／にかたり出れば、人々つきしろひ／て、何がしは此花の品さだめの博／士にこそ、と打わらひつ、盃あま／た、びめぐる程、暮はてにたるに／や、かほりみちたる木の間より、／夕月の影おぼろにさし出たる／は、なにとかや唐歌のこ、ろもお／ぼえて、いとおかしう。かぐや姫が／もとめし玉の枝も、光けおされ／ぬべく、ひとの帝のなきたま／もかへれと思ひこがれ給ひけん。／薫物のかほりもえこそたち／まさらじと覚るに、打ふく風に／けしき斗こぼれか、れるは、こと／さらびて、のみての、ちはなど／ふることも猶あかねば

きゞすなくあがたの宿にう／めの花たをりかざせり／風流士の友

となんによひ出けらし。

《補》

参考までに、『梅花辞』未所載の和文をあげておく。

森文庫蔵本収載本文のある場合（も、き・縫子）、それを底本とし、中之島図書館蔵本により補う場合（　）で示した。他は『梅花辞』翻印に準拠したが、「／」で改行を示すことはしなかった。

霞の衣み空にたちわたりて、おもふばかりに見ゆるころしも、おもふどちそことなく立いづるに、中〳〵に人けまれなるかたこそはとて、あがたわたりへゆきてみるに、いとふる木のうめぞあなる。そのほとりには、わらはべのおほくつどひて、我こそ道のしるべせめとそぼれつゝあらがふめるほどに、さそひがほにもかをりくる風は、おのづからにしるかりけり。かゝる香うちすべうもあらぬ、田づらのくろには、名もしれぬをぐさどももえ出たり。若なの色よきなどつみはやさまほしうおもへど、かたまもなしとわびあへるに、おもほえずこゝちまどひしとか。物がたり文にみえたらむさまの、いといつくしかるおもわのしづのめは、かみはおどろのしたよりかきでたらむと思ふが、ふぐしとかいへるにてなづむけはひ、ゑにかゝまほし。かたへにはほそきものから、きよくながるゝ水のうへに、くろ木もてわたしたるに、いづこのぞちりてうかべるもみゆ。あらたへのころもき、わらのくつはきたるをのこの、すみにぬりたらむさまなるが、くはといふものもちて、はたなどすきかへすにはあらで、なにをかようゐするさまもみゆるに、あやしげなるものをになひもちて、みゝなれことゞもうたひつれてゆくもあり。ゆき〳〵ていとひろきところに出たるに、けふりわたれるは霞にあらで、野をやく也ける。めなれぬこゝちにいとおどろ〳〵しくて、とく行過むとするに、こもれるもりのうちに雪たかうつもれると見ゆるは、いかにやなほきえのこれるや。袖さむきばかりの頃にしあれば、ひなには夜べもふりつみたらむなどいひて分入たるに、そこらひろく遠くはひわたりて、花のこちたくさきたる梅の香をりみちて、ひと木たてる也ける。かゝるもとにいほりして春のかぎりはといへるも、またその香にかしらくるしみてかほあかめるもあり。神のみまへにぬかづきつゝみるにきねがつゝみのおとあやしうかすかに、そでふるをとめ子などいとかう〳〵し。そこを過て野つかさにのぼりてみるに、わらやまばらなるに白くまろらかに見ゆるも、はじめのにおぼえてこたみはおぼめたともなくて、たれも〳〵うめのさきたるとしりて、ゆきてみむとおもふに、おどろ〳〵しき木の根にさゝなどいとこちたく生て、くたりがたからむほそき道のあるに、もすそをかゝへもちたらばいづこにかたよらむ。さはとてはひわたりなばひちりこむつかしからむなどとり〴〵に花に心をくるしめたる

ぞいとみやびにおぼえける。とかうするうちに鶯の一こゑ鳴にまろびおちぬべし。おもひなりてあしをそらにしてやう〳〵とをりたちてみるに、かきほのうめのわびがほにさきたるもあり。なほゆきてみるに、そま人の山たづをかたにせしがあゆみくれば、山にはさわらびのもえ出たるやとゆかしくてとふに、さるものはみえずとことふるを、春なるをいかなればといへば、み山には桜のさくひならではとはちふきつゝゆき過ぬ。ところからにかゝるこたへもいとめづらかにおぼえて、うちみやるにひとつのやどりなむある。なか〳〵にかゝるところにこそ人のとがむるばかりなるは有けるよといひつゝみるに、いぬのかよひぢもゆるされにたるとみゆる。すゑがいのくづれもいとをかしげにしなしたり。しばのとをしひらきてひとりのおきながうたへる歌、

春かぜにあつらへてしも都人に見せむともせしうめさきにけり

いざたまへ。よくもとはせたまふよと、花をいとあはれとおもへるさま、ねんずだいのすゝけたるしもゆえよしありけり。軒ばちかきが白き紅なるもあやしげにて、香をりみちたればものもおぼえず、おどろかれてかへさもよほしなどするに、あるじ大きやかなる枝をゝりてさし出たり。とりてさきにたてる人、夕かぜにちりかゝれるを、二月雪とうちずしたるに、あとなるがかをりだにのこせなどいへるにもあらず、おのがじゝこゝろはやさのいとをかしかることにこそ

常性尼（ママ）

きさらぎの空いとうらゝなるに春の野ゝ辺をわけばやと、朝とく立いではべりて、よものやま〳〵みわたせば、かすみのころもたちこめて、やゝ青みたる木ゝのこずゑも見えわかぬ斗なるに、かたへの田面はこぞかり取しまゝにあれまされど、さすがにはるのしるしとて、とぢし氷はとけゆきて、こゝかしこに生出るわかれをなん、つみはやしつゝゆく程に、吹わたる風もかをれるはいかなるかたの花ならむとをかしうもゆかしくてもとむるうちに、しづがやのあ

れにし軒に、いろがことなるうめのおのがこゝろのまゝに咲いでゝかをるめるも、みやこにはまだみぬものゝめづらかにおぼえて、咲にほふ軒ばのうめのはなのかにとはで、すぎうきしづがふせいほ、など口ずさみつゝめづるにあかぬはるの日ながらくれゆくをなむをしみつゝ、かへさにおもむきはべりぬ

あき子

あづさゆみ春の日かげの、いとのどやかに霞わたり、そのふのうめもひもときぬるころほひ、あがたわたりやいかならむと、かたへの人々にきこゆれば、さらぬだに野山をおもふころなれば、たれも〳〵おなじ心にそゞのかし立るまゝに、いでやその事ばかりせよといへば、いとうれしげにほゝゑみつゝ、みなともならん事をのみぞねぎ事にす。そが中にめのわらはなど、ことにそゞめきてとくたち出ねと、しば〳〵すゝむるに、さらばとて其日をさだめつ。今よりいもねられぬばかりおもほえんなどいひつゝふしぬ。その日になりぬれば、しのゝめのころしもみなおきいでゝおのがじゝあふさわにのゝしりて、いざ〳〵といひつゝゆけば、ほどもなくひろらかなる野べにしゝ立てぬ。名もしらぬを草みどりにふかゝるなかに、つくしぞ色もかたちも事そぎてをかしう生出たる、こと人の行かひもなきまゝにうしろやすくてやをらおり立て見るに、其あたりのさまいとおもしろし。なほゆきねかしと人々いへば、まだうちも返さぬ田のくろにつきて行に、しづのめがふたりみたり若なづむけはひ、いとめなれぬさま也。かゝるほどに春風のさそふ梅の香のいとゆかしくて、なほゆき〳〵てみれば、あやしきがにほにつくしのわたかづけたらむさまに、梅の咲みちたるぞ、さらにいはむかたなき里をさがさほのわたりとひこずば、かゝるにほひもしらで過ましとひとりこだる。たれも〳〵めがれせぬいろ香に、すがのねの長きねもやゝ暮かゝりぬ。はやかへりねと、をさめだつもとらがいへど、たゞ梅の香のみにぞ心ひかる。家あるじにこひて、一枝手折つゝ立かへるに、ゆふ月のかげおぼろにかすみて、ゑにかくとも、心のいたりなからんは書くうべくもあらずかし。のちのおもひ出でさにもとて、ものゝはしにか

一二六

くなむ

ませ子

空蟬の世にありと有物のうちに、くれ竹のさせるふしなきも、はやくなりいづれば、人にもめでられ、世にももてはやさるめり。一きはをかしとみゆるも、おくれたるはめづらしげなく、けをさるゝも口をしかりぬべく、ものにさいだち、時おくるゝけぢめばかり、いちじろき物なむなかりける。はるのほゝゑまるゝあした、秋のうれはしき夕、とり〳〵哀とみるうち、年さへ残りすくなく、ものすさまじく、人のこゝろもなぐさむかたなくなりはて、木草こと〴〵冬ごもれる雪の下より、ひそかにほころびそめて、色はいさゝまがひぬる物から、香はかくるゝかたなく、うちかをりくるは、ものにも時にもさいだちて、させるふしなきだに、になくおもはるゝを、まして色さへ香さへ、ゆかしくもなつかしくもめづらかにて、人にもめでられ世にももてはやさるゝは、この花をおきてなにか有む。梓弓はるの日影はなやかに、さしのぼりたるあした、みなみの枝はことさらに、あたゝかげなる露の、きら〳〵と玉のやうなるを、風ゆる〳〵吹て、ほろ〳〵とうちみだるゝは、花の散かとあやまたれ、雨そぼふりてものしめやかなるに、なびき合たる青柳を、かた糸によりて笠にぬふてふ鳥の、かなたこなた木づたひつゝ、おのれけざやかにさへづるも、花のにほひとなりてをかし。風もなきそこはかとなく霞たちこめて、ものをだしきよに、おぼつかなくにほひ出たる月かげの、花のひかりにてらされて、あたりばかりはくまなきに、誰袖ふれしと問まほしく、夕月のひかりをさまりて、星さへうちくもりつゝ、あやめもわかれぬに、かをりのみまぎるべくもなきには、誰も〳〵おほふ斗の袖こそあらまほしげなれ。かく時につけをりにふれて、とり〴〵めでらるゝものから、いらかたちつゞきたる家かげ、ほどなきつぼのうちなどにうつし植て、かしこをきりこゝをたわめなどしたらむは、おほ空の星の光を、たらひの水にうつしたらむが如くなるべし。いなかだつ外面、人けなき野づら、うまうしのふみならしたるくろなどにおひたちて、お

のがま、にひろごり、ほづえ空ざまにおひのぼり、ところ得てさきににほひたらむは、うるはしくもなつかしくもあくよなくをかしかりぬべし。きさらぎ斗消がての雲も残りなく、垣ねの小草もあをみつゝ、日いとはれわたりて、空のけしきうら〳〵と、鳥の声も心ちよげなるに、そそのかされて、おなじ心の友どち、ふたりみたり、まつ人の香にあやまつ人は、ありやなしや。あるじさだめず、花あるやどを水余にとて、ちかきあがたを問けるとき、ふところがみのはしへ、かいつけゝるそのうた

春かぜのかをるまに〳〵あくがれてうめさくやどに我は来にけり

ことしとて心なおきそうめのはな色かはひとをへだつものかは

もゝき

（あがたの梅をみることば）

しくものぞなきとひとりごちて、はしちかう詠めふしたるに、誰家にか有けん、横笛を吹出せるなりけり。月は霞てたど〳〵しきに、物の音は雲ゐにすみのぼりて、あはれさもおもしろさもたぐひなきに、軒の梅さへかをりあひて、いとゞえむなる物から、散たりやと吹すさむこそこゝろづきなけれ。ひときだにたゞならぬものを、もろこしのとおもひつゞけて、ぬるとしもなきに、いさこゝに事よせよとほこりかにいひしろふ。あらはなりとおもへば、引いりてみるに、へだてなくかたらふ、小少将侍従の君也。あたら夜をみすてゝぬるものか、いざたまへとて、手をとる〳〵うちのする。われにもあらでこはいづちへか。行へもなきこゝちするかなといへば、あなわか〳〵しとわらふ。ひきいづるよりいとをかし。やう〳〵明行空のけはひ、霞わたりてえむなるに、山寺のかねほのかに聞ゆ。ねぐらをいづるからす、ひとつ二つ飛行など、とり〴〵にをかし。誰きぬ〳〵をさそひてなどいひつゝゆくほどに、さと吹来る風の、たゞならず身にしみて、心ときめく。香はかくれなきものから、をりたちぬ。爰なむうめづの里ならんなどい

ふ。げに曙のけはひたとしへなしや。そこらひろかなるあたりに、こと木はなくて、梅のみぞ咲にさきたる。盛なるもあれば、散がたなるも有。げによき女の、ほゝゑみさしたるけはひおぼえてとか。式部が書けむ物語にもたがはぬものから、いとをかし。いひあはせねど、うめ重ねの衣きたるもをかし。うたてにほひのといひつゝも、袖にふれかざしにしつゝ、こゝろ〳〵にたはれぬ。かゝる有さまをうへの御まへの御覧ぜさせば、いかに興せさせ給はむ物を、本意なしや。たれかれをもいざなはで恨やすらむ。いとせめて家づとにとて、手ごとにをりてこゝらさしつれば、卯花事おぼえてをかし。かをりさへいみじきものから、下わらびをりしも、人にもまされりとしたりがほにいふ。時しもひげかちなるおきな出来て、しめゆひし人にも物せで、なめげにもおはするおもとたち哉。何がしの宮より朝奉りし物をとて、聞知らぬこと多くいひつゞくるに、おそろしうなりて、いかにせんとおもふ程に、夕つげ鳥の声はなやかに聞ゆ。うちおどろきみれば、人けもなし。さは夢にて有けるよと、おもふにおかし。小蝶になりし人はあれど、うつゝながらにあこがれあるきしためしやはあるとおもへば、われながらすき〳〵し。さるにても

ぬば玉の夢になしてもうめのはな散はつるまでなどみざりけむ

ぬばたまのゆめはよしなしうめの花うつゝに行てみるよしもがな

縫子